

『思想史で読む史学概論』

桂島宣弘*著、文理閣、2019年

松川雅信†

歴史学の方法論やその来歴、あるいはそもそも歴史とは何かといった類の問題は、これまで多くの歴史学者達によって論じられてきた。著者が長年にわたって立命館大学で担当されてきた史学概論の講義内容に基づく本書もまた、基本的にはそうした問題を扱っている。

しかしながら本書は、単なる歴史学の概説書に止まるものではない（勿論、そのことが軽視されているわけではない。例えば、マルクス主義歴史学・アナル派歴史学・世界システム論等、現在歴史学を学ぶうえで不可欠の歴史理論に関しては、それぞれ簡潔かつ明瞭に概説されている〔第6章「マルクス主義歴史学」および第7章「現代の世界史理論」〕）。本書で主眼に据えられているのは、「近代歴史学に生まれた思惟（近代人の歴史的思惟）の特質」（12頁）であり、これを著者が専門とする徳川思想史研究の立場から解明することで、もって「傲慢な思惟に居座るわれわれの立ち位置を反省的に捉え返すこと」（12頁）が目指されている。換言すれば、歴史が語られる際の歴史性をつぶさに捕捉することを通じて従前の史学を批判的に見つめ直すとともに、そこからさらに未来をも展望せんとする企図のもと、本書は著されていると考えられる。そこには、第10章「現代日本のナショナリズムと『教科書問題』」や、補論「わたくしの問題意識の来歴」からも窺われるように、著者自身の極めて現代的かつ先鋭な問題関心が伏在しているものと看取される。

もっとも、近代歴史学の要諦を成す実証主義が決して無色透明たり得ないことや、それがナショナリズムと不可分の関係性にあったこと等は、言語論的転回やポストモダンの思考を経た現代にあっては、むしろ常識の範疇に属しているといえるだろう。その意味では、歴史学の歴史性を明らかにしようとする試みそれ自体は、何ら真新しいものではないのかもしれない。が、本書がそれら往時の試みと一線を画すのは、著者が長きにわたり自身の専門としてきた徳川思想史の観点にあえて立脚し、かかる観点から「近代思想と徳川時代までの思想の非連続性」（14頁）を如実に浮き彫りにしている点にある。この点にこそ、本書の最大の特色があろうと思われる。

特に、第2章「徳川時代の歴史書の様式」では、そのような徳川思想史の観点に立脚した成果が余すところなく示されている。ここでは、「日本」の名を冠する前近代の歴史書が、実は一国史としての日本史を論じたものではなく、それらはすべて王朝史という様式をとっていたこと、またかかる様式は自らの固有性・特殊性よりも、「どのような王朝にも貫かれている共通性＝普遍性が強く意

* 立命館大学文学部教授

† 日本学術振興会特別研究員 PD
keiginaigai@gmail.com

識されていた」こと（52頁）、それゆえに徳川時代の儒者達は他国史としてではなく、普遍的な事柄を記した書物として他王朝の歴史書に接していたこと等が、明快に論じられている。そして、続く第3章「一国史としての日本史の特質」および第5章「『世界史』という言説」では、こうした徳川時代ないし前近代における歴史的思惟との対比において、近代歴史学の特質が別決されていくことになる。著者によれば、記述内容や記述目的のみならず、そもそも文体や時間意識といった側面においても、前近代の歴史書と近代歴史学との間には、多くの非連続性が認められるのだという。このように本書は、徳川時代の歴史的思惟を一つの参照系とすることで、近代以降のそれがもつ特質や問題点を逆照射的に明らかにすることに成功しているのである。

さらに興味深いのは、こうした徳川時代の思惟がいわば反転されていくなかで近代以降、著者の専門とする日本思想史学という学問分野が形成されるに至ったことが、第4章「日本はどのように語られるのか——その『作法』」において論じられている点である。上述したように、著者によれば、徳川時代の儒者達は歴史における共時性＝普遍性を強く意識していた。そのことはとりもなおさず、中国を同心円の中心とする東アジアが、「共時的・一体的世界（東アジア中華文明圏）」（93頁）として捉えられ、かかるもとに個々の歴史・思想・文化等が所在すると把握されていたことを意味する。さりながら、日本思想史学とは、むしろそうした「東アジア・中国から自覚的に日本を摘出する作業」（98頁）を経ることによって成ったのだと説明される（その祖型は「漢意」批判を行った本居宣長に求められている）。そして以後、東アジア・中国とは異なる日本像を描いていくことが、日本思想史学の「作法」として暗黙裡に定着していったのだと述べられる。注目すべきは、そのような「作法」が、丸山眞男ら戦後の著名な思想史学者達の営為を根底から規定していたのみならず、実に現代日本における日本像・他者像とも深い関わりを有しているのだと指摘される点であろう。すなわち著者は、自身が専門とする日本思想史学という学問分野そのものを歴史化してそこに内在する問題点を明示するに止まらず、そうした問題点が実のところ、現代日本の思惟の基底部分にも横たわっていることを強調しているのである。

近代学術が狭義のアカデミズムの領域だけでなく、現代日本の思惟をも広汎に規定しているとする問題に関しては、第9章「近代実証主義が問えないもの——植民地朝鮮における歴史書編纂」も大変興味深い。本章では、帝国日本が行った『朝鮮史』編纂事業がとりあげられている。この『朝鮮史』に対しては、「実証性」の名のもとに、戦後も依然として肯定的な評価が与えられ続けてきた。しかし著者は、まさにそうした「実証性」こそが、植民地支配を弁証する権力として強く機能していたことを鋭く指摘する。もっとも、近代学術がコロニアルな問題と表裏一体であった事実そのものに関しては、本書でも引用されているように、つとにエドワード・サイードらによって論じられてきたところである。本書にあって注視されるべきは、「実証的な精度を上げることだけでは、そこからすり抜けていく問題があること」（223頁）に改めて注意が促されると同時に、そのことが歴史教科書問題や「植民地近代化論」といった、現代東アジアの歴史認識問題とも相関的であると述べられる点にある。実証作業によって植民地支配の実態に迫っていただけでは未だ不十分なのであり（無論、かといって実証作業は看過されてはならず、従って恣意的解釈や歴史修正主義は断じて許されない。このことは第10章でも強調されている）、「実証性」それ自体をも俎上に載せねばならないとする著者の主張は、傾聴に値するだろう。

ところで、かように近代学術を批判的に対象化しようとする試みはしばしば、それがイデオロギー暴露に収斂しがちであるといった誹りを受けかねない。しかしながら本書に限っては、そのような

論難を浴びせかけるのは明らかな失当だろう。というのも本書は、歴史学・思想史学といった営為についての批判的考察を行いつつも、他方で、今後のあるべき研究の方向性の一端をも確実に明示してくれているからである。それこそ、第8章「トランスナショナル・ヒストリーという視座」で開陳されている、トランスナショナル・ヒストリーにほかならない。確かにトランスナショナル・ヒストリーという術語それ自体は、著者の独見にかかるものではない（本書ではとりわけ、韓国近現代史研究者の尹海東の議論が参照されている。なお、グローバル・ヒストリーやワールド・ヒストリーとは明確な差異化が図られている）。だが特筆すべきは、ここでも著者はあえて徳川思想史の観点に立脚することで、このトランスナショナル・ヒストリーを独自の視角から構想している点である。

徳川時代には、所謂鎖国史観とも相俟って、往々にして「閉ざされた」イメージが随伴する。しかし、著者はむしろ逆に、そうした徳川時代の思想家達においてこそ、『鎖国』像とは大きく異なった（トランスナショナルな）『生きられた世界』が顕著に認められる（195頁）のだと主張する。具体的には、徳川思想の展開の様相を一国内の事態としてのみ把握することはできず、それを「東アジア的な共時性の中での思想展開の一コマ」（201頁）として理解せねばならないことが提言されている。一例をあげれば、徳川時代における日本中華主義の台頭は、一見すると「排他的独自性の強調」（200頁）のごとく映るものの、実のところそれは、明清王朝交替を経て「華夷観の多元化」が発生したという、東アジア規模の出来事として捉え直される必要があるのだと述べられる。このような捉え直しの要求が、日本の固有性・特殊性に拘泥してきた（そしてそのことによって様々な問題・軋轢を生んできた）、既往の日本思想史学の「作法」を根底から覆さんとする意図に基づくことは、明白だろう。著者は、単に近代学術の問題点を指摘するに止まらず、その先をも確かに遠望しているのである。

「あとがき」によれば、著者が本書を執筆した背景には、「グローバル資本主義が猛威を振るう中で、今や歴史的思考自体が衰退しつつある現状に何とか悼したいという思い」（279頁）があったのだという。歴史学をはじめとした人文諸科学は、確かにかつてほどの社会的求心力を失いつつあるし、また歴史に鑑みないどころかそれを意図的に捻じ曲げようとする発言も、残念ながらよく聞かれる（「鑑戒主義」「直書主義」を掲げた儒者達はさぞかし嘆いていることだろう）。思うに、このような危機感はおそらく独り著者のみならず、少なくない研究者達においても共有されているところであろう（具体的問題関心の所在は各人各様だろうが）。近年の日本史学分野における史学史研究の盛行は、そのことを逆説的に裏づけているようにも考えられる。そして、現下かかる状況であるからこそ、いま一度、歴史学とは果たして何であったのか、あるいはそれが何をなしてしまったのかについて、根底から再考されねばならないことは、いうまでもない。本書は間違いなく、そのための好著であろう。